HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	間接照応と認知文法 その1
Author(s)	高橋, 英光
Citation	北海道大學文學部紀要, 44(3), 109-127
Issue Date	1996-03-29
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/33666
Type	bulletin (article)
File Information	44(3)_PL109-127.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学部紀要 44-3 (1996)

間接照応と認知文法—その1

高 橋 英 光

0 問題

小稿では間接照応という談話現象を認知言語学の枠組みの中で扱うことを試みる。具体的には Langacker (1984, 1987, 1991, forthcoming) が提唱する幾つかの認知的原理がこの現象の分析に有効である事を主張する。

照応とは通常(1)の a beautiful woman (先行詞) と she (照応表現) のような共指示の関係を言う。

(1) I met *a beautiful woman* yesterday. *She* is a doctor working in a nearby hospital.

これに対して(2)の,

(2) *A jet* ran into some turbulent weather. To keep *the passengers* calm, *the flight attendants* brought out the beverage carts....

the passengers, the flight attendants も照応表現と呼ばれ, これらの名詞句は前の文の a jet との意味関係で理解されるが, (1)のような直接的な共指示とは異なる。(2)のように共指示の先行詞を持たない照応は間接照応(Indirect Anaphora)と呼ばれ, 談話では頻繁に見られる現象で Gensler 1977, Sanford 1982, Sidner 1983, Brown & Yule 1983, Erku & Gundel 1987, Ariel 1990, Kurihara 1993, Matsui 1993 など非常に多くの語用論的, 心理学的研究がある。ここでは(1)のように照応表現が明示的な先行詞を持つ照応を「直接照応」, (2)のように明示的な先行詞を持たない照応を「間接照応」と呼ぶが, (1)の a beautiful woman も(2)の a jet も一様に「先行詞」と呼ぼう。ここでは照応

表現を(2)のような the N（定冠詞＋名詞）に限定し，また談話も相互に隣接する文・節の間の照応現象に限定して可能な一般化を試みる。

照応を成り立たせるのは日常の百科辞書的知識に基づく推論であることが知られている。間接照応には(3)のように多種多様なパターンがある。(3 a)のような「先行詞」を指摘しやすいものがある一方で，(3) b から(3) c/d ような先行詞を指摘し難いパターンもある。

(3) a I bought a car yesterday, but *the tyres* are old.

(3) b A: Do you know there are many young women who declare themselves legally bankrupt? -B: I don't quite get *the picture*. How would that happen?

(3) c Mary dressed the baby. *The clothes* were made of pink wool.

(3) d I once hit a stuck window with my fists. To try to shake it loose. One hand went through a glass pane. It took 10 stitches to close *the wound*.

しかしいずれの場合も照応的解釈を可能ならしめるのは百科辞書的知識による推論の働きである点では一貫している。

以上のような例を見ると，照応関係とは全て照応表現と先行詞候補との間に何らかの百科辞書的連想さえあれば成立するように見える。ところが(4)を見よう。

(4) We stopped for drinks at *the New York Hilton* before going to the Thai restaurant. *The waitress* was from Bangkok.

(Erku & Gundel 1987)

the waitress (from Bangkok)と強い連想があるはずの the Thai restaurant が先行詞とは解釈されない。連想が the Thai restaurant よりは弱いはずの the New York Hilton と照応関係にあると解釈される。また

(5) We stopped for drinks at the Hilton before going to the zoo.? *The baby orangutan* was really cute. (Erku & Gundel 987)

(5)の照応表現 the baby orangutan には百科辞書的連想の強い the zoo と言う恰好の先行詞候補があるにもかかわらず不自然な談話と判断される。この

様な興味深い現象に従来の研究は十分に明快な説明を与えていない。

照応現象の完全な分析には先行詞の資格と照応表現の資格を含む総合的な面からの分析が必要であろうが，ここでは次の3点にのみ議論を限定する。(A)間接照応を認知的原理で特徴づける。この結果，直接照応と間接照応が連続した現象としてとらえる事が可能であることを示す。(B)間接照応の幾つかのパターン—(3 a)—(3 d)—の分析を試み，その全てが(A)で提案する比較的単純な認知的原理の下で生じている事を示す。(C)例(2)—(5)のような the N の間接照応の（不）成立を予測するような一般的原理を探る。

1　方法

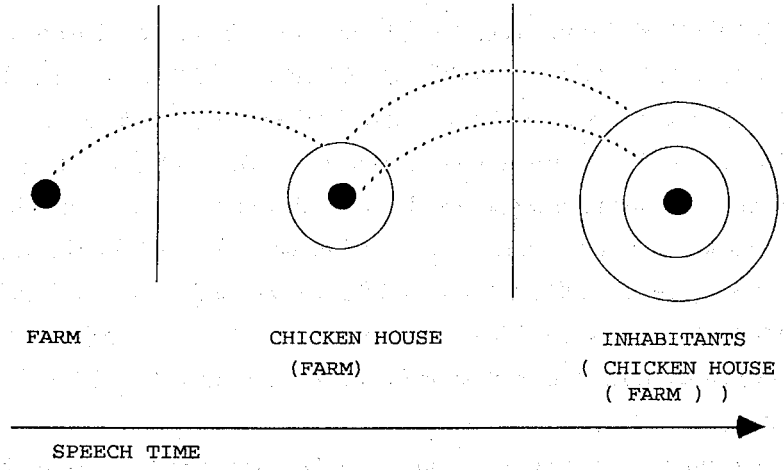
1.1　Profile と Scope

認知言語学が基盤とする意味論は百科辞書的意味論である（cf. Haiman 1980, Langacker 1984, 1987, etc.）。この立場では言語表現の意味はすべてある背景となる知識構造との関連で特徴づけられる。例えば sacrifice bunt と言う表現の意味は必然的に baseball の知識を背景とする。roof は house, mouse は computer の知識を背景とする。Langacker は言語表現が直接明示する指示対象を Profile，背景の知識を Scope（又は base, cognitive domain）と呼ぶ。ただし profile とその背景的意味の scope の関係は一面的とは限らない。例えば knuckle という言語表現の Profile は finger を scope とするが同時に hand さらに arm や body も Scope とする。この様な時 finger は knuckle の immediate scope, hand は knuckle の larger scope, arm/body は knuckle の larger scope 或いは overall scope と呼ぶ。さて Langacker が profile/scope として例証しているのは語彙レベルのみだが，このような認知的原理が談話レベルでも作用している事を以下で示そう。(6)の談話の中の三個の名詞句 a farm, the chicken house, the inhabitants 相互の意味関係を考えよう。

(6) We moved to *a farm* three years ago.　One winter night, a fox got into *the chicken house* and scattered *the inhabitants* far and wide(....)

まず第二文の the chicken house を解釈するには前文の a farm の知識が不可欠である。また the inhabitants を解釈するには直前の the chicken house の知識が不可欠である。the chicken house は前文の a farm と言う「全体」の「一部」として，また the inhabitants は the chicken house と言う「全体」の「一部」として解釈されている。a farm は the chicken house の背景的知識である点で a farm は the chicken house の profile（指示対象）に対して scope であると考えることができるだろう。同様に the chicken house は the inhabitants に対して背景知識（Scope）と言えるだろう。そしてさらに a farm は the chicken house の Scope であるばかりではない。the inhabitants に対しても包括的な背景的知識を形成している。この点で a farm は the inhabitants の overall scope と扱うことができる。以上の 3 個の名詞句の上の談話での意味関係の認知モデルは figure 1 のように図式化できる。

黒塗りされた小さな円は言語的に明示された対象（profile）を，細い線で描かれた大きな円は言語的に明示されていないが枠として作用している対象を表す。垂直の細い線は節・文の境界を表し，二個の円を結ぶ点線は指示対象



〈FIGURE 1〉 Profile/Scope in Indirect Anaphora

が同一である事を表す。

この図は次の三点を示す。第一に三個の名詞句は scope/profile の関係にあること。このような関係は百科辞書的連想によって形成される。単に名詞句が文・節にまたがって談話の中で連なっただけで scope/profle の意味関係が自動的に成立するわけではない事は(7)のような談話では照応が成立しない事からも明らかであろう。

(7) ?We moved to *San Francisco* three years ago. One winter night, a dog got into *the chicken house* and scattered *the 10 dollar bills*.

理由は下線の名詞句を含む文・節の全体的繋がりが著しく不自然ため，結果として名詞句相互に連想が見出だしにくいからであろう。

第二は，同一の対象 —— ここでは FARM や CHICKEN HOUSE —— が談話の進行の中で点的な概念化から広がりを持った枠組み的な概念化へ変化している事である（cf. Kemmer, to appear)。(6)の第一文の中の名詞句 a farm は「農場」と言う一つの実体概念を談話の中に新たに導入するだけである。One winter night に始まる次の文では FARM いう概念は表現されていないが，明らかにこの文の意味解釈に深く関与している。この事実をこのモデルは次のように取り扱う。FARM の概念は第二文の発話の時，話者・聞き手の短期記憶の中に保存されるが，保存されると同時に CHICKEN HOUSE の概念を直接包み込めるようにその対象が広げられて概念化されている。そしてこの一度押し広げられた FARM の概念は INHABITANTS の概念まで総括的に包み込むために拡げられたままになっていると言う事である。最後に矢印が示す Speech Time は，(6)の様な間接照応を談話の繋がりの根底にあると仮定される認知作用 scope/profile が現実の発話・理解の時間と同時的に (On-Line) に行われている事を示している。文であれ談話であれ意味解釈が語句が並んでいる順序と平行に行われるという分析は Tyler and Marslen-Wilson (1982), Sanford and Garrod (1981) 等の実験的研究の結果に合致する。

figure 1 のような分析は Chafe 1987 の分析から支持が得られる。一般に人間の頭脳は非常に多くの知識や情報が含むことができるが，一度に焦点を当

て活性化 (activate) できるのはこの内の僅かの部分に過ぎないという事が知られている。Chafe はこの心理学的知見に基づいて，人間がある特定の知識や情報を概念化する状態には（少なくとも）3種類あると提案し，それぞれ active, semi-active, inactive と呼んでいる。active とは今まさに焦点が当てられ，意識の中心となっている概念を指す。これに対し semi-active とは周辺的あるいは背景的に意識されているもので，直接は焦点を当てられていない概念である。一方 in-active とは人の長期記憶の中にあるもので中心的にも周辺的にも意識の中に無い概念である。これら3種の activation states の重要な点は談話の中で相互に一方から他方に状態が変化することである。例えば semi-active が active に変化したりまた逆の変化が起こる。さて figure 1 の中の Profile とは Chafe の3種の activation states のうち active concept に当たり，Scope が semi-active concept に当たる事を見るのは容易であろう。Chafe の分析に則して言えば(6)の談話の中の第一文の a farm は今活性化されている概念 (active concept) である。この概念が第二文では意識の周辺・背景に後退し semi-active concept に変化して，新たな active concept である chicken house を包む Scope として作用している。次に，最後の節〝scattered ...〟では FARM の概念は semi-active なまま話者・聞き手の意識の周辺に残る一方で CHICKEN HOUSE の概念が semi-active concept に変化してこれも背景に後退し，新しい active concept である INHABITANTS の二重の Scope として作用していると説明できる。

この節では談話(6)の3個の名詞句相互の照応解釈が Langacker が提唱する Scope/Profile という認知原理の下で起こっているという分析をし，このような分析が Chafe 1987 の情報・知識の活性化の状態（activation states）の分析に適合することを論じた。次の 1.2 では Det＋N の意味と機能を調べ，(6)の談話の適切性と(7)の不適切性を予測するような条件を提案することを試みる。

1.2 the *a N*～*the N* のつながり

1.1 では profile/scope と言う百科辞書的意味論に基づく認知原理が the

Nの間接照応に作用している事を主張した。しかし照応現象を支えるのはこれだけではなく文法形式Det Nの意味でもある。ここではDET+Nという文法型式——a Nとthe N——の意味が照応と言う現象の中にどの様な働きをしているか調べよう。DET+Nのついては最近3つの代表的研究——Hewson 1991, Hawkins 1991, Gundel et al 1993等があるが，このうちDETとNの意味に各々明確な説明を与えているのはHewsonである。

Hewsonによると，DET+Nはlexemeとreferentを表す。lexemeとは一種のラベルであり，一方referentとは外在世界ではなく話者の知覚の中の対象である。つまり話者は知覚・記憶の中のある対象に名詞でラベル(lexeme)をつけ，このラベルづけと言う行為によりそれまで名前がなかった対象は名前を持ったreferentになると言う。例えばa carというDET NはCARと言うラベル（lexeme）をつけることのできる対象（referent）を表す。一度ラベルがreferentにつけられると，このラベルを使うことによって同じreferentを同定したり取り出すことが可能になる。ラベルづけの行為は不定冠詞aを必要とし，かくして成立したlexemeを使う行為はtheを必要とする。

Gundel et alはDET Nのdet/Nの個々の意味の説明ではなくこの指示表現全体についての精密な使用条件を提供している。これによるとa Nの使用の条件はtype identifiableでなければならなく，the Nはuniquely identifiableである。なおGundel et alによるとthe Nはa Nの使用の条件を必ず含むのでthe Nの使用条件はtype identifiableかつuniquely identifiableと言うことになる。

この両者の分析の観点は異なるがGundel et alのtype identifiableはHewsonのlexemeに，uniquely identifiableはHewsonのreferentとほぼ対応している。Hewsonの分析はdet Nの全体の意味をその部分であるdetの意味とNの意味から説明しようとした非常に数少ない研究で貴重でありかつ有効であるが，一つの不備は間接照応の場合のthe Nを考慮していない事である。例えば(6)のthe chicken houseのように指示対象のラベルづけ(naming)があらかじめされていない場合を考慮していない。Gundel et alが

規定するようにthe N＝uniquely identifiableであるとすると，the Nがuniquely identifiableであるためには必ずしもその指示対象（referent）そのものが前もってラベルづけされる必要がないことは間接照応をみれば明らかである。profileの代わりにscopeがラベルづけされていることによってuniquely identifiableになる。そこでまずthe Nの直接照応と間接照応のどちらにも通用するような使用条件を前に見たprofile/scope という認知的要因を取り入れ提案してみよう。

(8) Condition for the anaphoric usage of the N: First Approximation
Either the profile or scope of *the N* must be named (labelled) in the immediately preceding discourse.

the Nのprofileがラベルづけされた場合が直接照応に当たり，scopeがラベルづけされた場合が間接照応に当たる。後者の場合figure 1で描かれたような認知作用により，the Nの指示対象はuniquely identifiableとなると考えることができる。この点で(8)の条件はthe Nの直接・間接どちらの照応の用法も網羅すると言えるだろう。

条件(8)は上の(7)や次の(9 a－b)の繋がりが不適切であることを正しく予測する。

(9 a) ?I bought a new PC. The baby was crying.

(9 b) ?I went to work by bus yesterday. The farmer was a little drunk.

我々の百科辞書的知識によればnew PCはbabyのScopeにならないし，busはfarmerのScopeにならない。profileもscopeもあらかじめ明示されなければthe Nは照応表現として機能しない。では条件(8)はthe Nの間接照応の用法をすべてを網羅するだろうか。少なくとも次の二点で完全とはいえない。第一に(10)のような語用論的間接照応――the Nが会話の場面・空間の中の一部を表す照応――を網羅しない。

(10) (In a restaurant)
A: Where is *the waiter?* -B: We've been waiting almost half a hour.

第二に(6)のような比較的単純な「全体―部分」以外の間接照応パターン(3 b－d)がscope/profileの観点からいかにしてとらえられるのか定かでない。こ

のことから the N の間接照応の使用の条件はもっと一般性が高く抽象的でなければならない。

2 間接照応

2.1 条件

the N の間接照応には(8)よりもさらに抽象度の高い認知的原理が働いていると考えられるが前の議論で明らかになった。ではそれはどの様なものであろうか。(3) b−d と(10)の例をよく観察して共通している事は，照応表現 the N にすぐ先立つ談話においてこの the N と何らかの点で百科辞書的に関連づけが可能な対象が話者・聞き手の意識・注意の対象になっていることである。一般にこのようにある特定の対象を人間が意識・注意する行為を Langacker (1991: 550) は「心的接触」(mental contact) と呼んでいる。ある対象との「心的接触」は無論結果として restaurant とか car と言語的に明示化され易いが，時には「心的接触」をしていても言語化されないことも多い。がいずれにしても「心的接触」という概念は（間接）照応という現象の根幹にある本質的な作用である。以上の議論を踏まえると間接照応の根底にある認知的原理として(11)を提案することができる。

(11) Condition for Indirect Anaphora by *the N*

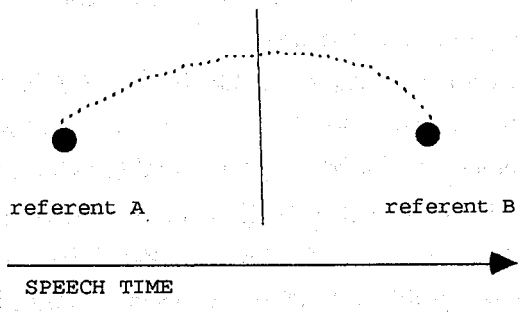
The conceptualizer must make mental contact with the referent (referent A) associable with the referent (referent B) of *the N* in the immediately preceding discourse.

(11)の the conceptualizer (概念者) とは話者・聞き手を総称する言葉である。referent は Hewson 1991 と同じく外界ではなく概念者の意識の中の対象を意味する。referent A は「先行詞」の指示対象であり通常は条件(8)の Scope にあたる。典型的には referent A は実体 (entity(s)) だが，後で示すように複数の実体相互の関係を表す出来事 (event) の場合もある。referent B は照応表現の指示対象＝profile に相当する。associable とは最も抽象的に「百科辞書的連想可能性」の意味で使う。また Langacker (forthcoming) と同様に

有るか無いかという二者択一ではなく，連続体を成すものとして考える。

(11)の条件の特徴は以下の3点で適用度の広い条件である所にある。第一に語用論的な間接照応 —— 例(10) —— を網羅する。(10)の場合 referent A は発話の場面 restaurant である。さて話者・聞き手とも the waiter という名詞句の発話に先立って waiter（=referent B）と「連想可能」な restaurant という対象と「心的接触」が成立していると分析する事は自然であろう。第二に間接照応を直接照応と関係づけて統一的に扱うことを可能にする。換言すると直接照応も網羅する。第三にすぐ後で説明するように全ての間接照応のパターンを網羅する。

まず何故この条件が直接照応を網羅するかを説明しよう。一般に二個の対象が associable —— 意味的に関連する —— と言っても，その具体的な関連の仕方は多様である。この関連の仕方の中でも究極の関連は完全な同一（identity）と考えることができる（cf. Langacker, forthcoming)。このような場合は associable が identical と読み替えられ referent A と referent B は同一であるから，その認知モデルは figure 2 のように描くことができる。figure 2 は，例え二個の名詞句 —— 先行詞と照応表現 the N —— の種類（ラベル）は異なっていても指示対象は完全に同一である場合を表す。二個の名詞句の指示対象の「同一性」を「関連」の特殊な症例と位置づける事がもし正しければ，figure 2 は直接照応を間接照応の特殊な例と位置づけることに



〈FIGURE 2〉 Direct Anaphora

なるだろう。例えば(12)のように従来の分析では推論 (bridging implicature) を含むが故に「間接照応」と扱われた例も直接照応として分類できることになる。

(12 a) *A bus* came roaring round the corner. *The vehicle* nearly flattened a pedestrian. (Garrod & Sanford 1977)

(12 b) Draw *a diameter* in black. The line is about three inches. (Yule 1981)

(12 a) の A bus と the vehicle, (12 b) の a diameter と the line は名詞によるラベルづけは異なるが referent が完全に同一である点で, (1)の a woman と she の関係と同じく直接照応と扱えるだろう。「推論」が必要なのは間接照応だけに限ったことではない。(12)のような同一の対象の異なる名詞による言い換えは, 指示対象の概念化の際の抽象度の違いの直接の結果である。VEHICLE は BUS より上位概念であり, LINE は DIAMETER より上位概念である。

次にいかにして(11)の条件が (3 a−d) で例証した様々な間接照応のパターンをとらえるかを見ることにしよう。

2.2 間接照応の幾つかのパターン

以下では先の(3) a−d に代表される 4 つの間接照応のパターンを個別に観察し, それぞれの照応解釈を成り立たせていると考えられる認知モデルを提案する。第一の間接照応のパターンは INCLUSIVE とでも呼べるものである。この時, 照応表現の指示対象 (referent B) は先行詞の指示対象 (referent A) に対し「部分—全体」の関係にある。例(2)の a jet と the passengers/the flight attendants の関係, (3) a の a car と the tyres の関係もこれに当たる。

(2) *A jet* ran into some turbulent weather. To keep *the passengers* calm, *the flight attendants* brought out the beverage carts.

(3 a) I bought *a car* yesterday, but *the tyres* are a little too old.

この認知モデルは上の figure 1 に当てはまる。第一文で言わば点的に喚起された対象が次の文では拡張され照応表現の指示対象を包み込む背景知識

(immediate scope) となっている。(13)の例も INCLUSIVE に分類されるだろう。

(13 a) I looked into *the room*. *The ceiling* was very high. (Clark 1977)

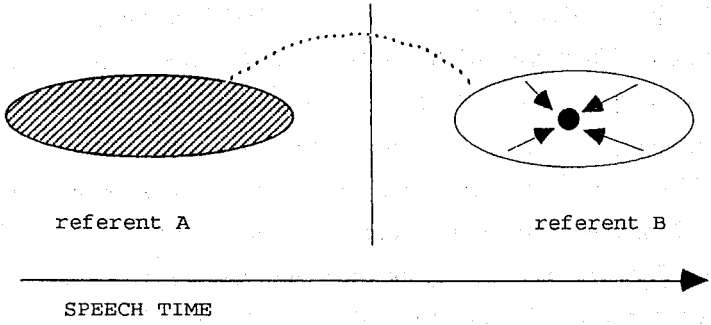
(13 b) I got on *a bus* yesterday and *the driver* was drunk. (Prince 1981)

第二の間接照応のパターンは SUMMATION とでも呼べるものである。この時 referent A は文・談話が示す複数の要素間の複雑な関係からなる出来事 (event) である。この出来事を照応表現が entity 的に要約的にとらえなおし概念化している。この照応の認知モデルは figure 3 のように描くことができる。

SUMMATION には話者による出来事の評価や比喩的ラベルづけを表す名詞が選ばれやすい。(3) c がこれに当たる。

(3 c) A: Do you know there are many young people who declare themselves legally bankrupt? -B: I don't get *the picture*. How would that happen?

(3 c) の話者Bの発話の中の the picture は実体的 (entity) 概念だがこれは直前に話者Aが述た出来事 (event) を一言で要約したものである。重要なことはこの時 the picture と言い換えられた出来事の具体的な内容は semi-active concept として the picture の背後に働いて picture の意味の背景



〈FIGURE 3〉 Indirect Anaphora: SUMMATION

scope を成していると考えられる。(14)の例もこのパターンに当てはまるだろう。

(14 a) Someone suggested a weekly get-together with our families included. Everyone liked the idea.

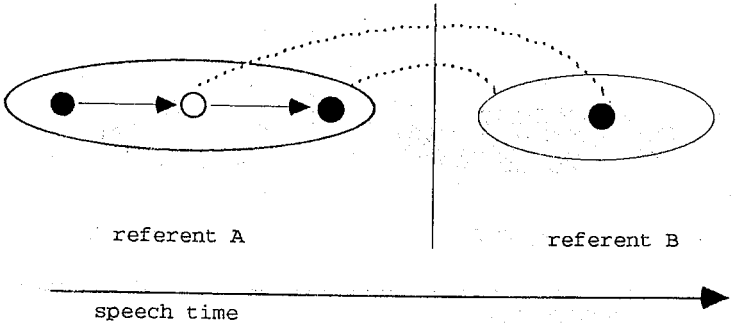
(14 b) In this country it is socially acceptable for women to cry, scream or hug other women. "Real men" aren't permitted to do any of *the above*. A man who cries, screams or hugs a member of the same sex is immediately suspect.

第三の間接照応パターンは PROFILING OF THE UNPROFILED と呼ぼう。これは referent B が直前の文が表す出来事（referent A）に必然的に含まれるが言語的に明示されなかった要素を表記する場合である。この照応の認知モデルは figure 4 のように描くことができる。

(3 c) がこれに当たる。

(3) c Mary dressed the baby. *The clothes* were made of pink wool.

この図が示すのは最初の文の他動詞の dress が 3 個の要素間の関係を表すが，そのうち二個の要素 —— Mary と the baby —— だけが active concept として言語化され，CLOTHES という要素は言語化されていないことである。しかし clothes の概念は semi-active な概念としてこの文の意味に関与して



<FIGURE 4> Indirect Anaphora: PROFILING OF THE UNPROFILED

いる。従ってこの談話では the clothes という概念が semi-active から active concept へと活性化の状態が変化していると考えることができる。またここでも前の文が表す出来事の具体的内容は clothes の意味の背景知識 scope となっていると考えることができる。figure の詳細は異なるが(15)もこのタイプに属するであろう。

(15 a) I had my palm read six months ago in Indianapolis. *The woman* told me I would be moving to a smaller city "soon," which turned out to be true.

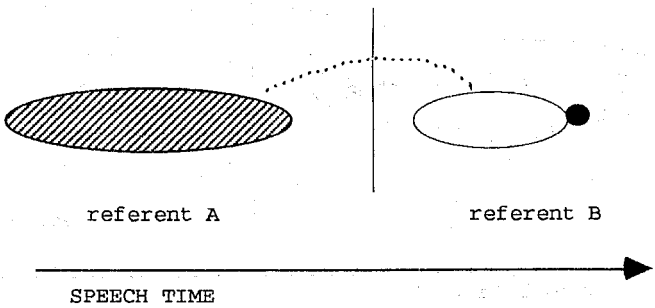
(15 b) The millionaire was murdered. *The killer* left no clues for the police to trace.

(15 c) We drove to New York but *the car* was a little too old.

最後の間接照応パターンは CONCOMITANT と呼ぶことができる。この認知モデルは figure 5 のように描くことができる。

(3 d) に例証されるように Referent A は複数の要素間の関係を表す出来事 (event) である。さて referent B は SUMMATION と異なりこの出来事そのものを指し示すのではなく，また PROFILING OF THE UNPROFILED のように出来事の一部を指し示すのでもなく，出来事に必然的に付随すると考えられる実体・事柄・事態などを指し示していると言える。

(3) d I once hit a stuck window with my fists. To try to shake it loose.



〈FIGURE 5〉 Indirect Anaphora: CONCOMITANT

One hand went through a glass pane. It took 10 stitches to close *the wound*.

この場合も照応表現 the wound の意味解釈には直前に述べられた経験・出来事が semi-active concept として scope の作用をしていると考えられる。

(16)の例もこのタイプであろう。

(16 a) Sandy is now a beautiful 20-year-old and a sophomore in college. Recently, a friend of hers was married. While discussing *the wedding*, Sandy surprised me by saying that when she gets married, she won't have a wedding.

(16 b) Ten years ago, Bill impregnated his girlfriend Sally. Both were 16. When Sally's condition became obvious, her parents sent her to a maternity home out of state, and *the baby girl* was placed for adoption.

上の4パターン INCLUSIVE, SUMMATION, PROFILING OF THE UNPROFILED, CONCOMITANT は網羅的な分類を意図したものではない。また相互の境界が必ずしも明確とは限らない。中間的なものもあるであろう。(2) の jet と passengers/flight attendants の照応は INCLUSIVE TYPE でも CONCOMITANT とも分類することもできる。同様に BUS と DRIVER の関係を CONCOMITANT と扱っていけない積極的な理由はない。

ここでの目的は間接照応の厳密に，網羅的な分類をすることではない。少なくとも上の様々なパターンが(11)の原理の下で生じている，つまりこれらの間接照応には二個の referent の間に意味的連想性（associability）があり，その意味的関連性とは究極的には scope-profile という認知的関係である事を示すことである。また(11)のような特徴づけの利点としては間接照応が直接照応と断絶した現象ではなく，むしろ連続した現象と分析できることである。通常の理解とは逆に間接照応が特殊な現象と言うより，むしろ直接照応が間接照応の特殊な，極端な例と見なすことも可能という事である。

References

Ariel, Mira

1988 Referring and accessibility. *Journal of Linguistics* 24, 67-87.

1990 *Accessing noun-phrase antecedents*. London: Routledge.

Brown, Gillian and George Yule

1983 *Discourse Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.

Chafe, Wallace

1987 Cognitive constraints on information flow. In Tomlin, R. (ed.), *Coherence and Grounding in Discourse, TSL* vol. 11, Amsterdam: John Benjamins, 21-51.

Clark, Herbert H. and C.R. Marshal

1981 Definite reference and mutual knowledge. In Joshi, A.K., B.L. Webber and I. A. Sag, eds., *Elements of discourse understanding*. Cambridge: Cambridge University Press, 10-64.

Clark, Herbert H. and C.J. Sengul

1979 In search of referents for nouns and pronouns. *Memory and Cognition* 7-1, 35-41.

Erku, Feride and Jeanette K. Gundel

1987 Indirect anaphors. In J. Verschueren, M. Bertuccello-papi, ed., *The pragmatics perspective*. Amsterdam: John Benjamins. 533-546.

Fauconnier, Gilles

1985 *Mental Spaces: Aspects of meaning construction in natural language*. Cambridge: MIT Press.

Fox, Barbara

1987 *Discourse structure and anaphora*. Cambridge: Cambridge University Press.

Garrod, S.C. and A.J. Sanford

1982 The mental representation of discourse in a focussed memory system: Implications for the interpretation of anaphoric noun phrases. *Journal of Semantics* 1, 21-41.

Gensler Orin

1977 Non-syntactic antecedents and frams semantics. *Proceedings of the Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Sociery* 3, 321-334.

Gernbacher, M.A.

1991 Comprehending conceptual anaphors. *Language and Cognitive Processes* 6-2, 81-105.

Givon, Talmy

1983 *Topic continuity in discourse: A quantitative cross-language study*. Amster-

dam: John Benjamins.

1989 *Mind, Code and Context: Essays in Pragmatics*. Hillsdale: Lawrence Erlbaum Associates.

Gundel, Jeanette K., Nancy Hedberg and Ron Zacharski

1993 Cognitive status and the form of referring expressions in discourse. *Language* 69-2, 274-307.

Haiman, John

1980 Dictionaries and encyclopedias. *Lingua* 50, 329-357.

Halliday, M.A.K., and Rugaiya Hasan

1976 *Cohesion in English*. London: Longmans.

Hawkins, John

1978 *Definiteness and Indefiniteness*. London: Croom Helm.

1984 A Note on referent identifiability and co-presence. *Journal of Pragmatics* 8, 649-659.

1991 On (in) definite articles. *Journal of Linguistics* 27, 405-442.

Hewson, John

1991 Determiners as heads. *Cognitive Linguistics* 2-4, 317-337.

Johnson-Laird, P.N.

1981 Mental models of meaning. In Joshi, et al, 106-126.

Kemmer, Suzanne

To appear, Emphatic and Reflexive *-self*. In Stein Deter & Susan Wright, eds., *Subjectivity of subjectivization in language*. Cambride: Cambridge University Press.

Kitis, E.

1987 A Comment on John Hawkins' 'A Note on referent idenrifiability and Co-presence'. *Journals of Praomatics* 11, 93-95.

Kurihara, Takehiko

1993 daimeishiniokeru Accessibility no gainen (On the notion of Accessibility in pronominal anaphora). *The Northern Review* 21, 19-35.

Langacker, Ronald W.

1984 Active Zones. *Proceedings of the Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society* 10, 172-188.

1987 *Foundations of Cognitive Grammar, vol 1, Theoretical Prereguisites*. Standord: Standord University Press.

1990 *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.

1991 *Foundations of Cognitive Grammar, vol 2, Descriptive Application*. Standord:

Standord University Press.
(forthcoming), Raising and Transparency.
Lyons, John
1977 *Semantics* vol 2. Cambridge: Camvridge University Press.
Mackay, Donald G. and David C. Fulkerson
1979 On the Comprehension and Production of Pronouns. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior* 18, 661-673.
Marslen-Wilson, Willian, Elena Levy and Lorraine Tyler
1982 Producing interpretable discoures: the establishment and maintenance of reference. In Jarvella, R.J. and W. Klein eds., *Speech, Place and Action*. Chichester: Wiley, 339-378.
Matsui, Tomoko
1993 Bridging reference and the notions of 'topic' and 'focus'. *Lingua* 90, 49-68.
Minsky, M.
1975 A framework for representing knowledge. In P. Winston, ed., *The psychology of computer vision*. New York: Mcgraw-Hill, 211-277.
Murphy, Gregory
1985 Psychological explanations of deep and surface anaphora. *Journal of Pragmatics* 9, 785-813.
Prince, Ellen
1981 Towaed a taxonomy of given-new information. In Cole, P ed., *Radical Pragmatics*. New York: Academic Press.
Reingart, Tanya
1983 *Anaphora and semantic interpretation*. London: Croom Helm.
Sanford, Anthony J. and Simon C. Garrod
1981 *Understanding written language: Explrations in Comprehension beyond the sentence*. Chichester: John Wiley & Sons.
Sidner, C
1983a Focusing and discourse. *Discourse Processes* 6, 107-130.
Sperber, D. and D. Wilson
1986 *Relevance: Communication and cognition*. Oxford: Blackwell.
Tokizaki, Hisao
1991 doitsushijino goyouronteekigenri (A Pregmatic Principle on coreferring interpretation) *Hokkaido University, Faculty of Letters* 39-3, 73-90.
Tomlin, Russell S. and Ming Ming Pu
1991 The management of reference in Mandarin discourse. *Cognitive Linguistics*

2-1, 65-93.

Tyler, L. and W. Marslen-Wilson

1982 The resolution of discourse anaphors: some on-line studies. *Text* 2, 263-291.

van Hoek, Karen

1992 *Paths Through Conceptual Structure: Constratints on Pronominal Anaphora.* San Diego: University of California doctoral dissertation.

Ward, Gregory, Richard Sproat and Gail Mckoon

1991 A pragmatic analysis of so-called anaphoric islands. *Language* 67, 439-474.

Webber, B.

1981 Discourse model synthesis: Preliminaries to reference. Joshi, A. et al.

Yule, George

1979 Pragmatically controlled anaphora. *Lingua* 49, 127-135.

1981 New, current and displaced entity reference. *Lingua* 55, 41-52.